

2023年5月14日 礼拝メッセージ

「信頼に値するかた」

水谷憲牧師

聖書 テサロニケの信徒への手紙Ⅱ 3章 1-5節

私たちは、この世界の歴史からするとほんの一瞬ではあるけれども、しかしそれでも私たちから見ると途方もなく長い人間の歴史を日々更新し続けているところで生きています。そして私たちは今、これまでの人間の歴史の中で、最も心をすり減らすことの多い時代に生きていけると言えるかもしれません。パウロは「コリントの信徒への手紙Ⅰ」において「信仰と希望と愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である」(13:13)と書いているわけですが、しかし今や信仰を金儲けの道具とする者が現れたり、あるいは、強い者はますます強く、豊かな者はより豊かになる一方で、弱い者はますます弱く、貧しい者はより貧しくさせられてしまう私たちの社会の仕組みによって、若者も老人も希望を持って人生を歩んでいくことが困難になりつつあります。そして、そんな社会の中にあっては、パウロの言うところの最も大いなるものであるはずの愛さえも、人間の欲望や快樂の道具へとおとし貶められてしまったりしています。真面目に、地道に生きる者が報われることもなく、むしろバカを見るようなこの世界にあって、私たちはもはや何を信じていけばよいのかわからなくなるときがあります。

「守銭奴」というと言いきかかもしれませんが、金儲けに熱心になっている人々はよく「人は裏切るが、カネは裏切らない」などと言います。「ルカによる福音書」19章には、ちょうぜいにん徴税人の頭であったザアカイの話が出てきます。人々から税金を搾り取る徴税人であったザアカイは、自分の私腹を肥やすために税金を多めにだま騙し取っていたためにみんなからだかつ蛇蝎のごとく嫌われていたのですが、このザアカイがイエス・キリストとの出会いによって心に再び愛を取り戻し、自分の財産の半分を貧しい人に施し、騙し取っていた金はそれぞれ「4倍にして返します」と誓うほどに変えられた、という話です。このザアカイも、人間関係に悩み、隣の人と手をとってつながってゆくことに失望した経験があったのかも知れません。ザアカイは人々に嫌われ、嫌がらせをされようとも、決して自分の弱いところを見せようとしませんでした。本当は彼だってみんなに愛されたいはずなのに、生きてゆくためには徴税人という仕事をしなければならなかった。「嫌うなら嫌えばいい。こっちにも考えがある。

カネを多めにふんだくってやる。カネさえあれば、友達なんていなくても結構」。彼は友だちがいない寂しさを、カネで紛^{まぎ}らわせていたのでしょう。彼は、あふれるほどの金で立派な家に住み、きらびやかな服を着、使用人をはべらせて自分のコンプレックス、すなわち友だちがいないこととか、背が低いこととかを覆^{おお}い隠し、自分もそのことについて考えなくていいようにしていたのかもしれませんが。彼は弱い自分を他人にも見せたくなかったし、自分でも認めたくなかったのです。私も20歳を過ぎたばかりの頃、やたらと自分を飾っていたことがありました。指には指輪をはめ、手首には腕輪をし、首からはジャラジャラと何本ものネックレスを下げて革ジャンにGパン、ブーツにサングラスでカッコつけていたことがありました。「あれ？」今もあんまり変わってないような気が……。でも、昔はもっとチャラかったんです。今思えば、当時の私もやはり弱い自分、だめな自分を直視したくなくて、「後輩にヘコヘコできるか」「大学なんぞまじめに行ってもらえるか」などと無理につっぱることで自分にバリアーを張っていたように思うわけです。しかし、そのうちにふとしたきっかけで教会に通うようになり、その中で自分が無理をしていることに気付かされ、無理してつっぱることがしんどくなってしまいました。今では若い頃になりたかった自分、金をがんがん稼いで、いい服着て、かっこいい車乗って、華やかに遊んで…といった自分とはまったく正反対になってしまったこと、しかもそういう人生の「勝ち組／負け組」のような勝負から下りてしまった今の方が我ながら気に入っていることを思うと、改めて「人生分かんもんやなあ、でも神様がこっち側に引っ張ってくれて本当に良かったなあ」という思いを強くしています。

さて本日の聖書では、キリストの使徒であるパウロが「兄弟たち、わたしたちのために祈ってください」(1)などと言っています。地中海世界を何度も宣教旅行して、キリスト教徒を育てて回ったパウロともあろう人、彼の多くの手紙を通して人々に「～しなさい、～しなさい」と伝えている指導的なパウロが、実に意外な謙虚な一面を見せています。この手紙はコリントという都市で書かれたといわれています。当時のコリントはひどい都市で、「コリント人のように生きる」とは「みだらな生活をする」ということを意味したと言われているように、キリスト教の伝道が大変困難な土地であったようです。パウロは、コリントでの伝道がこの手紙の宛先であるテサロニケでの場合のようにうまくいくようにと、どうか祈っていてくれと頼んでいるわけです。また彼は他の手紙の中でもしばしば、受取人である信徒たちに自分のために祈ってくれるように頼んでいます。

私たちは自分に何か困難な問題が起こった時、「私のために祈ってください」と誰かにお願いしたりしているでしょうか。基本的には、自分のことで誰かに迷惑をかけたくない。もしも誰かに何かを頼むことがあるとするなら、直接何かを「手伝ってください」と頼むことはあるかもしれないけれども、「お祈り下さい」と頼むことはきつくない。「祈って下さい」と頼んでみたところで、その人が本当に祈ってくれているか分からないし、仮に祈ってくれたとしても実際何の足しにもならないではないか、そもそも祈ってもらったくらいで自分のこの問題が解決するならば世話はないのだ、などと思ってしまう。私でもそう思ってしまう。しかし残念ながら、その傲慢な姿はまさにザアカイのように、強がることで自分の弱さやコンプレックスを人目に付かないように覆い隠し、隣人とつながることを自ら拒否する姿だといえるのかもしれない。それに「効果があるんだったら祈ってもらうけれども、効果がないんならわざわざ祈ってもらわなくても結構」という風に、「祈り」の力を視覚化して評価しようとするのは、「自分が誰かに祈られることの意味」を考えることなく、私のために祈りを^{ささ}げしてくれる人の思いを踏みにじるものでもあるでしょう。それは、祈ることしかできないけれど……といいながら自分のことを心にかけてくれる隣人に対して誠実ではない。そして、祈ったところで神様がどうにかしてくれるわけではない、と初めから諦めてしまっている姿も、神様に対して謙虚とはいえない。「誰かのために祈る」とは、「その誰かである隣人と共に生きる」ということなのに。

「隣人と共に生きる」とは、隣人の抱える重荷を共に担って下さるイエス・キリストに加勢するという、自分もその担い手に加わるということでもあります。しかしそれは何か具体的な形で隣人をサポートすることのみを意味するわけではない。具体的な力となることはできないけれども、自分も共に心を痛めて寄り添おうとする誰かの存在が、その隣人にとって何の足しにもならないはずはない。力にならないはずはないのです。もちろん、祈っても祈っても神は何も答えないではないか、という声もあることでしょう。中には祈りが結局聞かれなかったと失望し、信仰を捨ててしまう人もいたことでしょう。しかし、神様は本当に祈りを聞かれなかったのか。そうではなく、神様がお答えになる前に、私たちが自分で勝手に諦めて見切りをつけ、祈りをやめてしまったからではないのか。私たちが神様に祈る時に足りないのは、「待つ」ということ、聞かれるまで忍耐強く祈り続けることなのかもしれません。聖書では、何度となく「主を待ち望め」と語られています。私たちは「神様聞いてくれへんやないか」と早とちりをして、自分で勝手に失望してはいけないのです。

もちろん、いつ神さまが答えて下さるかは私たちには分からない。モーセの訴えに神さまがすぐに答えて下さったように、私たちの祈りにもすぐに答えて下さるかもしれませんが、イザヤのインマヌエル預言が700年の後にイエス・キリストの降誕という形で成就したように、場合によっては長い時が必要なのかも知れません。さらに、神さまは私たちの祈りに対してどのような形で答えて下さるのかも、私たちには分からないことです。キリストが十字架で磔^{はりつけ}になって死んだことは、ペトロやユダを初めとする弟子たちにとっては思いもかけないことでしたが、それによって神様は人間を罪から救いあげ、新しいイスラエルを創造するという計画を成就されたのです。ですから、私たちは祈っても聞かれないと諦めてしまうことなく、「求めよ、さらば与えられん」(マタイ 7:7)とのイエスの言葉を頼りに、粘り強く祈っていかなければならないし、祈りにどれほどの力があるかと祈りの力を見くびることなく、隣人に対しても謙虚に祈りの力を貸してもらえるように求めていったらいいのです。そして今日のパウロはそのことを率先して実践しているというわけです。

3節には「主は真実な方です」とあります。これはフランシスコ会聖書研究所の訳では「信頼に値するかた」とされています。神様は私たちが問題を抱えている時、苦難のうちにある時、必ずその祈りを聞いて下さる。そして、私たちの望むとおりでないかもしれないけれども、私たちにとって最善の仕方、必ず答えて下さる。本日はいわゆる「母の日」、「家族の日」ですが、子どもに対する母の姿、両親の姿がまさにそのようなものかもしれないと思います。もちろん世の中にはいろんな親がおるわけですが、しかし多くの親は子どもが知っていようと知っていなかりと、変わらず子どものために身を削り、子どもの横顔を見ながら幸せな人生を送れるようにとの願いを持っていることであろうと信じます。そしてそんな私たちの親と同様に、神様は真実な方だ、信頼に値する方だとパウロは力強く語っています。必ずあなた方を強め、悪い者から守って下さいますと。神様がそのように信頼に値する方だからこそ、私は神様に祈るのだし、あなた方にも祈ってもらいたいのだと。私たちも、自分は気づいていないかもしれないけれども、私のことを見てくださる神様、その神様のことを信頼に値する方だと信じて、早々に失望しあきらめることなく、共に祈りの輪を広げていきたいものだと思います。